

(博士課程)

論文審査及び最終試験の結果

| | | | |
|----------------|---|------|---------|
| 学位申請者 | Julaila Binti Abdul Rahman | 学籍番号 | 0D401 |
| 申請学位 (専攻分野) | 博士 (工学) | 専攻 | 工業デザイン学 |
| 論文題目 | 'Catch up' Structure for Design Development -Focused on Relationship between Japan and Malaysia- | | |
| 成績 | 論文審査及び最終試験 | | |
| | 合格 | | |

平成 26年 1 月 16 日

拓殖大学長 殿

審査員主査 木 嶋 彰



審査員 戸 塚 泰 幸



〃 岡 崎 章



〃 佐 々 牧 雄



〃 塚 原 政 知



〃 印

| | |
|-------|--------------------------|
| 論文発表会 | 12 月 14 日 |
| 論文審査 | 12 月 14 日 から 1 月 15 日 まで |
| 最終試験 | 1 月 15 日 |

(注) 論文審査及び最終試験の成績は「合格」「不合格」の評語で記入すること。

(博士課程)

論文審査の要旨及び審査員

(2000字程度)

| 報 告 番 号 | 第 号 | 氏 名 | Julaila Binti Abdul Rahman | |
|-----------|---------------|-----|----------------------------|-----|
| | 氏 名 | 職 名 | 氏 名 | 職 名 |
| 論 文 審 査 員 | 主査 木嶋 彰 教授 | | 戸塚 泰幸 教授 | |
| | | | 岡崎 章 教授 | |
| | | | 佐々 牧雄 講師 (非常勤) | |
| | | | 塚原 政知 デザイナー | |

論文題目： 'Catch up' Structure for Design Development
-Focused on Relationship between Japan and Malaysia-

上記5名による審査員会は、本論文についての精査を行い、大学院工学研究科工業デザイン学専攻における博士後期課程学位審査基準を充足しているか否かについて慎重に審査を行った。

本研究は、デザインのキャッチアップを「他のデザインを認識し、それをもとに自ら新たなデザインを創出すること」と定義し、日本のデザインをマレーシア向けにキャッチアップした場合を事例として4つのデザイン事例について考察したものである。

本論文は、6章から構成されており、各章の関係は、分かりやすく論理的に構成されている。第1章および第2章では、従来のデザインのキャッチアップが個人の認識に依存していることに対しグローバルな視点から組織的取り組みを可能とする新たな方法論の確立の必要性を論じ、本研究を位置づけ、今日のデザインが直面する課題を明らかにしている。また、その中でデザインのキャッチアップのタイプを「新しいカテゴリーの創出：New trend」「既存カテゴリーの拡大：Enhance existing trend」「既存カテゴリーへの組込：New type in existing trend」という3つの仮説を導いている。第3章～第5章では、キャッチアップの具体的な内容や特性を明らかにすることを目的として、4つのデザイン事例について分析を行っている。事例は、現在日本から世界に発信しているデザイントレンドである「かわいい」を取り上げ、その浸透の程度ごとに、かなり知られている例として：1) ファッション、あまり知られていない例として：2) ステーションリー、ほとんど知られていない例として：3) 乗用車のエクステリア、さらに、両国で各々に独自のデザインスタイルが定着している事例として：4) 乗用車の内装材(ファブリック)を取り上げている。これらの事例の考察は、必ずしも章立てと一致するものでなく、記述量に偏りも見られるが、全体としての論文構成に論理的な一貫性が認められる。

考察の方法は、各事例とも日本人とマレーシア人を被験者として、膨大な量のデザインサンプルをMDS(類似性の判定)あるいはSD法(尺度法)を用いた評価データとして収集し、因子分析、クラスター分析により布置空間を作成し、両者のデザインのとらえ方の相違を相対的に導いたものであり、各事例について緻密な分析が行われていることが認められる。

結論は、4事例ともひとつの事例がひとつのモデルで説明されるのではなく、その中のカテゴリーに

よって複数のモデルが複合する形で存在していることを明らかにし、仮説とした3つのキャッチアップのタイプではなく、4つのタイプとして纏めている。これらは、「初見のため新しいカテゴリーとして認識せざるを得ないNew trend」「既存のカテゴリーに新たな認識の広がりを与えるEnhance existing trend」「既存のカテゴリーへスムーズに組み込まれるNew type in existing trend」「デザインの特性がうまく認識されないCombination on several trends」という特性をもつものである。

これらの各デザイン事例の考察結果は、5件の査読付き国際会議での発表および4本の査読付き学会論文（2本は掲載済、1本は採択済み掲載予定、1本は査読中）として、すでに外部の評価を受けており、学術的な新規性を認めることができる。ただし、独創性については、審査の中で以下の異論があったことを付記する。それは「調査・解析を行わなくてもある程度の結論が想定できるのではないか」というものである。しかし、本論文の独創性は、個人の想像や認識ではなく科学的なデータに裏付けられた具体的な内容を示したことにあり、デザインのキャッチアップが、デザイン事例によって異なることを明らかにしたことを評価するという意見に集約できた。

また、本論文で取り上げた各デザイン事例の考察の結果は、文化やライフスタイルとの適合を想定した組織的なデザインのアプローチを可能とする新しい方法論の確立に寄与するものといえる。今後発展が期待される途上国におけるデザイン振興に貢献し、グローバルなデザイントレンドを反映しながら、独自のデザイン創出を支援するための具体的な指針となりうるばかりではなく、日本が日本文化を含めたデザインを輸出するにあたって、考慮すべき要件を具体的なかたちで提示している。したがって、本論は社会的有用性に立脚した課題設定がなされ、主題のさらなる発展の可能性がうかがえるものといえる。

審査委員会は、上述した理由により、本論文を博士(工学)の学位論文として認められると判断した。